

## Voldemort の呼び名から見る 「ハリー・ポッター」シリーズ

三池 洋江

### はじめに

「ハリー・ポッター」シリーズ（以下、本シリーズ）の著者 J. K. Rowling は、幼い時から地名や人の名前に興味を持っていたようである。その証拠に、インタビューの場で自身の生まれた地について聞かれると以下のように答えている。

ブリストルの近くの、チップング・ソドベリーです。これが私のご自慢！きつとその名前のせいで奇妙な名前の場所に魅せられる運命だったのだわ。

（ローリング、フレーザー 2001, 12）

また、墓を好きな理由を名前のアイデアの宝庫であるからと話している（ローリング、フレーザー 2001, 13）。彼女が地名や名前に大きな関心を寄せていることがわかる。

「ハリー・ポッター」シリーズのアイデアが浮かんだ当時について質問されると、「まず登場人物が思い浮かび、あとからそれぞれにぴったりの名前を考えなければならなかった」（ローリング、フレーザー 2001, 40）と答えている。それぞれの人物に「ぴったりの名前」と話している通り、彼女が作り出す登場人物には、その人物の特徴を表す名が付与されている。例を挙げると、hogwartsの校長 Dumbledore のファーストネームである Albus は、ラテン語で「白い」「よい」という意味である（寺島 2008, 309）。善の魔法使いであるという彼の印象を名前が後押しする。他にも、Sirius Black の Sirius とは、おおいぬ座を表し、Black は黒いという意味である（寺島 2008, 448）。彼が黒い犬に変身できるという特徴をその名が表している。

さらに、Rowling は、主要人物だけでなく、舞台上に一度しか現れない端役にもフルネームを与え、作品上でその名を登場させている。例えば、第5巻 *Harry Potter and the Order of the Phoenix* では、Dudley が殴ったマグルの少年 Mark Evans の名を Harry が台詞の中で言及している。Mark Evans は Harry の台詞内で一度登場し

て以降、本人が姿を現すこともなく、作品上大きな役割を担う訳でもない。第1巻 *Harry Potter and the Philosopher's Stone* では、Harry が寮に組分けされる時、他の新入生の名前も呼ばれるが、彼らの多くはその後登場しない。作品上、重要ではない登場人物にもフルネームが与えられていることは、作者の名前への関心や、作者が名前の作成を楽しんでいることを表している。

本シリーズと同様に魔法を扱う作品の中で、魔法と登場人物の名前の間に大きな関連を持つのが「ゲド戦記」シリーズである。この作品の中では、相手の真の名前を知ることによって、その者の命を掌握することができる。名前自身が魔法と深く関わった作品であると言える。一方、「ハリー・ポッター」シリーズでは、名前自身が魔法や呪文に何か影響を与えることはほとんどない。名前そのものには、魔力が込められていない。後述することになるが、本シリーズの登場人物にとって重要なのは、名前自身ではなく、相手の名前をどのように扱うかという点である。Rowling が考え抜いた登場人物の名前は、名前自身ではなく、その名を他者がどのように扱うかが肝要である。ゆえに、本論文では、本シリーズにおいて、呼び名や名づけを通して名前の扱われ方を見ていく。

本論文では特に、Harry Potter の宿敵である Voldemort の呼び名に着目する。本シリーズでは、主人公 Harry と Voldemort の戦いが作品の主軸となる。Harry にとって最大の敵となる Voldemort であるが、作中では彼への呼び名が複数存在する。Voldemort は、本名の Tom Marvolo Riddle という名前を捨て、自らに Voldemort という名前を付けている。しかし、魔法使いの多くは Voldemort の名を口にするのではなく、配下である the Death Eaters もそうは呼ばない。the Death Eaters からは、Master、My Lord、The Dark Lord などと呼ばれている。他方、the Death Eaters 以外の多くの魔法使いからは、You-Know-Who と呼ばれている。この名は、魔法世界の人々が Voldemort と呼ばなくて済むように用いた呼び名である。だが、Dumbledore や Harry など少数からは、Voldemort と呼ばれている。Dumbledore は、Voldemort がかつての教え子 Tom Marvolo Riddle だと覚えており、直接 Voldemort と話すときには Tom と呼びかける。Harry は、You-Know-Who、Voldemort、Tom Riddle と敵への呼び方を巻が進むにつれて変えている。以上のように Voldemort は、You-Know-Who、Voldemort、Master、My Lord、The Dark Lord、Tom Riddle など複数の呼び名を持つ。これは、他の登場人物にはない、彼特有の現象である。

本論文では、魔法世界の人々が使った You-Know-Who という呼び名、Voldemort 自身で行った名づけ行為、Harry の Voldemort に対する呼び名の変更に注目したい。Voldemort は、本シリーズの中で一貫して、魔法世界を脅かす Harry の最大の敵で

ある。その Voldemort への呼び名と名づけの行為を取り上げることにより、敵への向き合い方という本シリーズが提示するメッセージを考察していきたい。

第1章では、本シリーズにおいて、登場人物間で他者の名前をどのように扱っているかを見ていく。名前の扱い方には、その名前を持つ相手への意識が表されるということ指摘していく。第2章では、第1章を踏まえて、Voldemort に対する You-Know-Who という呼び名は、Voldemort へのどういった意識が働いているのかという点を示す。次の第3章では、Voldemort 自身による名づけを取り上げる。彼は、本名を捨てることで Voldemort という仮面を被り、本来の自分や過去を隠して生きてきた。本当の名を用いず、本来の姿を仮面で覆うという点は、第2章で述べる You-Know-Who という仮の名の使用にも繋がっている。第4章では、Harry が You-Know-Who、Voldemort、Tom Riddle と敵への呼び名を変えている点について述べる。Harry の呼び名の変化は、敵への意識の変化である。この意識の変化は、Harry が敵から逃れようとはしないからこそ起こったことである。全4章で以下、論じていく。

ここでは呼び名とひとくくりになっているが、誰に話しかけているかによって呼称と言及称に分けられる。国広哲弥は、「『呼称』という名称は英語の 'address form [term]' の訳語として導入」（国広 1990, 4）されたと述べ、「英語と同じ意味『話し相手に直接に呼びかけたり言及したりする語』（国広 1990, 4）であると説明している。また、言及称は、「reference form [term]」（国広 1990, 4）と表記される。言及称とは「『話題にされる第三者を指すのに用いる語』（国広 1990, 4）である。本論文では、呼称を話し相手に対する呼び名、言及称を話題の人物に対する呼び名と考え、Voldemort に対する呼称と言及称両方をまとめて呼び名として扱う。

## 第1章 他者の名前の扱い方が表すもの

まず、「ハリー・ポッター」シリーズにおいて、他者の名前がどのように扱われているのかを見ていき、それが何を表しているのかについて考察する。そのため、本シリーズの中から他者の名前の扱い方に関する例を複数挙げる。

最初に、呼び名が何を表すのかを提示する。第5巻 *Harry Potter and the Order of the Phoenix* で母親である Petunia は息子の Dudley を Diddy と呼び、可愛がっている。両親にとって Dudley はまだまだかわいい小さな坊やであるとの認識がこの名から分かる。一方、Dudley は友人から Big D と呼ばれ、仲間内のボスとして見られている。母親の認識とは違い、息子は体の大きいじめっ子軍団のリーダーである。両親は、息子の暴力行為に気づいておらず、その対比が滑稽さを生み出す。

Hagrid が Madame Maxime について話す際に、Olympe という彼女のファーストネームを用いる場面がある。Ron は Madame Maxime と Olympe が同一人物と分からず、“Who?” (Rowling 2000, 623) と返答している。Hagrid は、Harry や Ron、Hermione には Olympe という呼び名が誰を指しているかわからないと気づく。彼はその後の会話で、“Madam Maxime ter you” (Rowling 2000, 624) と言い直している。しかし、“ter you” (「お前たちにとっては」) という発言から、Hagrid が Madame Maxime と二人で話すときには Olympe と呼んでいることが想像できる。呼び名が二人の親密さの度合を表している。渡辺友左は、「呼称 (人の呼び方) は、呼ぶ人が呼ぶ相手との関係をどうとらえているかで決まる」(渡辺 1998, 4) と述べている。他者をどう呼ぶかには、相手への見方が表れていると言えよう。

さらに、名前を間違えることで相手に対する関心のなさも表される。第4巻 *Harry Potter and the Goblet of Fire* で、Barty Crouch は Ron の兄 Percy に偶然会った際、Weasley ではなく、Weatherby と呼んでいる。Percy は、上司である Crouch を崇拜し、精一杯おもてなししようとする。だが、名前を間違われたことにより、Crouch が部下の Percy に興味がなく、彼を気にかけていないことが分かる。Percy があまりにも Crouch の名前を頻繁に家ですることから、Ron があの二人はそのうち婚約発表すると皮肉るほどだが、実際は、名前さえ覚えてもらっていない。Crouch と Percy の二人の気持ちが対照的であり、そこに滑稽さが生まれる。実際に、Crouch が名前を間違えたことに気づいた Fred と George は笑いを抑えきれなくなっている。

第6巻 *Harry Potter and the Half-Blood Prince* においては、魔法薬学の先生 Slughorn が Ron の名前を Rupert と誤って言及する場面がある。Slughorn は、身内に有名人がいる、その子の学業が優秀であるなど、将来有望そうな学生に特別に目をかける人物である。お気に入りの学生にはパーティーに招待するといった最良行為を行う。彼らが学校を卒業し、職に就いた際、何らかの恩恵にあずかろうと狙っていることが理由である。そのため、有名な Harry、優等生の Hermione は彼のお気に入りに入るが、Ron には目もくれない。よって、Ron への無関心さが名前を誤ることで表現される。

第2巻 *Harry Potter and the Chamber of Secrets* で魔法史を教える Binns は、ノートをひたすら読み上げる退屈な授業を行う。Hermione に質問された際に、教え子である Hermione の名前を分かっていないことが明らかになる。Hermione 以外の他の学生の名前も間違えて呼ぶ始末である。いかに、学生に関心がないのかがよく分かる。彼が常に目の前の歴史のノートにしか関心を払わず授業を行い、学生に目を向けてこなかったことが表れている。

第4巻 *Harry Potter and the Goblet of Fire* では、三大魔法学校対抗試合に関する記事が新聞に載る。しかし、ほとんどの記事は Harry についてしか書かれていない。他の代表選手の名前は綴りが間違っているか、名前が出てこない。その記事を書いた記者 Rita Skeeter の関心が、かの有名な Harry Potter にしかないことが分かる。その人物に関心がない、興味がないということが名前を間違えるという行為で描かれる。

最後に、「ハリー・ポッター」シリーズの最終巻 *Harry Potter and the Deathly Hallows* のエピローグを例に出す。ホグワーツに向かう汽車の前で、Harry は、スリザリン寮に組分けされることを心配する息子に対して以下のように述べている。

‘Albus Severus’ Harry said quietly, so that nobody but Ginny could hear, and she was tactful enough to pretend to be waving to Rose, who was now in the train, ‘you were named for two headmasters of Hogwarts. One of them was Slytherin and he was probably the bravest man I ever knew.’

(Rowling 2007, 607)

Harry が一番勇敢な人物と評するのは、スリザリン出身の Severus Snape である。Harry と Snape は、Harry の父親と Snape が犬猿の仲であったことから、お互いに憎み合ってきた。Voldemort が復活し、戦いが激化すると、Harry は Snape が Dumbledore ではなく Voldemort の味方なのではないかと思うこともあった。しかし、敵側の一員のような振る舞いを見せてきた Snape が、実は Dumbledore 側の人間であったことが最終巻の第33章で明らかになる。大きな危険に足を踏み入れながらも Voldemort 陣営へのスパイ行為を行ってきた理由は、Harry の母親 Lilly への愛のためだった。だが、次の第34章では、Harry が Snape の真相に対してどう思ったのかという心情は描かれていない。よって Harry の Snape への気持ちは分からないようになっている。だが、Harry の心情は、最終巻のエピローグ、息子に語りかけた言葉で分かる。それが上記の引用である。息子に名づけた Severus という名前には、Harry の Snape への尊敬の念が表れている。息子の名前は、Harry の Snape への心情、Snape への見方を表す一つの重要な表現となっている。

このように、本シリーズでは度々、相手の名前をどのように呼ぶか、どのように扱うかによって、その人物についてどのように考えているかが示される。登場人物の感情を表現するのに用いられているのである。このことから、呼び名が相手への見方を表すということが分かる。

## 第2章 You-Know-Who という呼び名

前章で、本シリーズでは他者の名前の扱い方が相手への見方を反映している例を述べてきた。この点を確認した上で、魔法世界の人々が Voldemort に用いる You-Know-Who という呼び名には、どのような意識が表れているのかを本章で見ていく。Voldemort には、You-Know-Who 以外に He-Who-Must-Not-Be-Named という呼び名も用いられている。両者とも Voldemort という名を呼ばないための仮の名であることは一致する。しかしながら、魔法世界の人々の間では、You-Know-Who が使われることが圧倒的に多い。本章では、Voldemort に対する仮の名の代表として、You-Know-Who を主に取り上げる。

下記は、第1巻の冒頭、Dumbledore と McGonagall の会話である。Voldemort は魔法世界で You-Know-Who という呼称を用いられていることが確認できる。

[. . .] ‘As I say, even if You-Know-Who *has* gone –’

‘My dear Professor, surely a sensible person like yourself can call him by his name? All this “You-Know-Who” nonsense – for eleven years I have been trying to persuade people to call him by his proper name: *Voldemort*.’ Professor McGonagall flinched, but Dumbledore, who was unsticking two sherbet lemons, seemed not to notice. (Rowling 1997, 14)

Harry が1歳当時、Voldemort は、その悪業から多くの魔法使いや魔女に You-Know-Who と呼ばれている。You-Know-Who とは、Voldemort の名前を言わなくて済むように用いられた仮の名前である。恐怖の対象には、仮の名が使われている。hogwarts の副校長である McGonagall でさえ、Voldemort の名前を口に出すのを躊躇う程である。上の引用では、Dumbledore が You-Know-Who という呼び名に否定的な態度を示している。この点については、第3章で述べる。その後、10年という年月を経て、Harry がhogwarts に入学する時になっても Voldemort という名は多くの魔法使いから呼ばれずにいる。以下の引用は、Harry に Voldemort について説明し、Voldemort という言葉を発しようとする Hagrid の様子である。

He [Hagrid] sat down, stared into the fire for a few seconds and then said, ‘It begins, I suppose, with – with a person called – but it’s incredible yeh don’t know his name, everyone in our world knows –’

‘Who?’

‘Well – I don’ like sayin’ the name if I can help it. No one does.’

‘Why not?’

‘Gulpin’ gargoyles, Harry, people are still scared. [. . .]’ (Rowling 1997, 44-45)

Hagridは未だに魔法使いや魔女がVoldemortに恐れをなしていると話す。そのため、魔法世界の多くの人々がVoldemortではなくYou-Know-Whoと呼ぶ。この風潮は、Harryが11歳になっても変化していない。

その一方で、マグルであるDursley一家は、Voldemortという名前を聞いても、何の恐れも抱かない。

‘Lord Voldemort,’ said Harry.

He registered dimly how strange it was that the Dursleys, who flinched, winced and squawked if they heard words like ‘wizard’, ‘magic’ or ‘wand’, could hear the name of the most evil wizard of all time without the slightest tremor.

(Rowling 2003, 38)

Dursley一家は、普段の生活の中で魔法や魔法使いという言葉に異常な恐怖心を見せている。それにもかかわらず、Voldemortという名前を聞いても恐れた様子を見せない。Voldemortという言葉そのものは、一つの固有名詞というだけであり、恐怖を与えるものではない。しかし、その名前にどのような意識や苦々しい記憶を持っているかで、名前に対する反応は異なる。

本シリーズの中で、登場人物が持つ恐怖の感情は、そのもの自身とは異なる名前を使用することだけでなく、名前を伏せるということによっても表される。Dursley一家は、彼らにとって恐怖の対象である魔法や魔法関連の事物、はたまた自分たちの都合の悪いものに対して、口を閉ざし、言葉に出さないことによって自らを守っている。恐怖の対象を直視せず、やり過ごそうとする姿が、その事物の名前を出さないことによって描き出されている。また、第2巻*Harry Potter and the Chamber of Secrets*では、蜘蛛のAragogは、Harryから秘密の部屋にいる怪物について聞かれても答えようとはしない。

‘We do not speak of it!’ said Aragog fiercely. ‘We do not name it! I never even told Hagrid the name of that dread creature, though he asked me, many times.’

(Rowling 1998, 206)

“that dread creature”である怪物の名前を Aragog の一族は口に出さないと言う。本シリーズでは、恐怖の対象の名前を出さないという描き方を用いて、登場人物が恐怖の感情を持っていることが示されている。

Voldemort は、恐れられるがゆえに、その名を呼ばれることなく、You-Know-Who という仮の名で言及される。恐怖の対象である Voldemort の名前を直接口に出すことに躊躇いを感じる理由は何であろうか。穂積陳重は、『忌み名の研究』の中で、実名敬避の習俗について述べている。穂積は、国家が形成される初期段階では、君主の不可侵権は広大な延長性を持つと指摘し、以下のように続ける。

故に君主に対する敬避は接触の感覚から視覚、さらに聴覚におよんで、君主は単に身を以てこれに触れこれに近づき目を以てこれを見るべからざるのみならず、声を以てもこれに近づくべからざるものとした。これが実名敬避俗の生じた理由であり、酋長その他の尊貴の者の名を唱えることを避諱する習俗は、さらに一般に他人の実名を唱えないことを礼とするにいたったのである。

(穂積 1992, 193)

実名敬避は、声を用いて敬うべき対象に近づくことを避けることから始まっている。これは「声による『接触のタブー』」(穂積 1992, 197)であり、声による「接触のタブー」は、「古今東西を通じてあまねく行われる世界的習俗」(穂積 1992, 197-198)である。タブーとは、「原始的民族の心的状態に起因した行為の禁諱であって、これを犯すときは必ず特種の災害をこうむると信ずるが故に、ある行為を忌み避けるにいたったもの」(穂積 1992, 186)である。Voldemort は、the Death Eaters 以外には尊貴の対象ではない。しかしながら、Voldemort という名を口に出すことで、その名を持つ人物に接触できるほど、至近距離にいるような錯覚を起こす。恐ろしい存在に近づいてしまうことによって、自らに災難が降りかかるのではないか、何か恐ろしいことが起きるのではないかという意識がもたらされる。この意識が、Voldemort を You-Know-Who と呼ぶことへと繋がったのではないだろうか。

ジェームズ・フレイザーは『金枝篇 (二)』の中で、実名を言うことのタブーが北アメリカやエジプト、ローマなど世界中に見られることを数々の例を挙げながら述べている。前述の引用にも上げた通り、穂積も、実名敬避の習俗が古今東西に存在していることを指摘している。実名へのタブーは、広く世界中に見られると言える。

You-Know-Who という仮名については、次章の中で Dumbledore の発言を引用しながらさらに考察する。

### 第3章 Voldemort 自身による名づけ

本章では、Voldemort の自らに対する名づけを取り上げる。Voldemort という名は、Voldemort 自身がホグワーツ在学中に自身で名づけた名前である。彼は、その名について、いつか人々が恐怖で口にできなくなると確信していた。

[. . .] I fashioned myself a new name, a name I knew wizards everywhere would one day fear to speak, when I had become the greatest sorcerer in the world! (Rowling 1998, 231)

彼の本名である Tom という名は父親の名前からとってつけられた。しかし、マグルである父親を Voldemort は軽蔑していた。the Death Eaters の Barty Crouch Jr が、自分と Voldemort の共通点を “Both of us, suffered the indignity, Harry, of being named after those fathers.” (Rowling 2000, 589) と述べている。Voldemort は、自らに名づけを行うことで、本名を捨て、父親との繋がりを断とうとしたのである。名づけについて市村弘正は、「物事を創造または生成させる行為であり、そのようにして誕生した物事の認識そのもの」(市村 1996, 134) と述べる。Voldemort は、名前を創造することで、なりたいと望む自己を創造したと言える。彼は、名づけを通して、蔑むべきマグルの息子ではなく、人々に恐れられる偉大な魔法使いへと自分自身への見方を変えたのである。

Voldemort は、Voldemort という名をいずれ人々が恐怖で口に出すことができなくなると考えていた。彼の予想通り、魔法世界の人々は、恐怖からその名を呼ばなくなる。裏を返すと、Voldemort と呼ぶ人物は、彼を恐れない人物である。Dumbledore や Harry を代表に、the Order of the Phoenix のメンバーである Sirius Black や Remus Lupin、第5巻からは Hermione が Voldemort と呼んでいる。Voldemort の名を用いることは、恐れず彼と戦うという意思表示に結びつく。第7巻で、Voldemort は、Voldemort という言葉を発した人物の位置が分かるように魔法をかける。Voldemort という名前を使うことで、位置情報が敵に伝わり、その場に Voldemort の一味が現れることになる。この魔法は、抵抗勢力を見つけ、追い込むのに役立つ。呼び名を封じることによって、Voldemort に抵抗しようとする行動も封じようとしている。Voldemort は、呼び名に隠された人々の意識を巧みに利用し、Voldemort という名前を強制的に使用できなくしたのである。

ホグワーツ入学前の Voldemort は、Tom という名前を持つ人が他にもいると聞く

と、いらだたしい様子を見せる。その態度の理由を Dumbledore は考察し、Harry に教えている。

‘There he showed his contempt for anything that tied him to other people, anything that made him ordinary. Even then, he wished to be different, separate, notorious. He shed his name, as you know, within a few short years of that conversation and created the mask of “Lord Voldemort” behind which he has been hidden for so long.’ (Rowling 2005, 259)

Voldemort は、自分と他者を結びつけるものを拒否していた。自分が凡庸な存在であることに我慢がならなかった。Dumbledore は、Voldemort がどのような物を Horcrux に選ぶかを推理する際、Voldemort の特質を挙げている。彼は、“His [Lord Voldemort’s] pride, his belief in his own superiority, his determination to carve for himself a startling place in magical history.” (Rowling 2005, 471) を持っていた。こうした傾向がある Voldemort にとって、Lord という称号は、他者と異なる並外れた力を持つ自分にふさわしいものと考えられたであろう。

the Death Eaters は、自分たちの主を呼称では Master や My Lord、言及称では The Dark Lord と呼んでいる。主人とそれに仕える者という関係を示すかのような呼び名である。主人への恐怖心、あるいは敬意から、彼らはそう呼んでいると考えられるが、いずれにしても Voldemort と呼ぶことはない。

前述の引用の中で、Dumbledore は、Voldemort は自分の名前を捨て、Lord Voldemort という仮面 (the mask) を創造したと発言している。仮面を被るということは、その下にある本来の自分が隠されるということになる。Voldemort という名前の創造は、本来の自分を覆う仮面の創造でもあった。また、Dumbledore は、Voldemort が自分のつけた名前の後ろに隠れてきたと話す。仮面をつけ、その後ろに隠れることによって、Voldemort はマグルの息子という気に入らない事実から逃れようとしてきたのである。その事実を直視し、受け入れる道を選ばなかった。本名を捨て、その名が持つ父親との繋がりを捨て、仮面を被ることを選択したのである。

Voldemort は卒業後、ホグワーツの教師の職に就きたいと願っているため、Dumbledore に対面している。その時すでに Voldemort と名乗り始めており、自分は近頃 Tom とは呼ばれなくなっていると語る。しかし Dumbledore は、“But to me, I’m afraid, you will always be Tom Riddle.” (Rowling 2005, 414) と語る。Dumbledore は、第5巻でも Voldemort に対して Tom と呼びかけており、Voldemort が隠してきた仮面の下の Tom Riddle を常に見てきた。

Lord Voldemort という仮面を創造したことと、人々が Voldemort という名前から逃げ、You-Know-Who という名前を用いたことには類似点がある。その点を、Dumbledore が You-Know-Who という名前を使わないよう Harry に話す場面から探ることができる。

‘Sir?’ said Harry. ‘I’ve been thinking . . . Sir – even if the Stone’s gone, Vol- . . . I mean, You-Know-Who –’

‘Call him Voldemort, Harry. Always use the proper name for things. Fear of a name increases fear of the thing itself.’ (Rowling 1997, 215-216)

Dumbledore は、本当の名前を怖がり、不適切な名で呼んでいると、そのもの自身への恐れがさらに増幅すると述べる。魔法世界の人々は、Voldemort という名前を口に出さず、You-Know-Who という言葉を使って、Voldemort という人物を近くを感じることを避けてきた。You-Know-Who を用いることは、敵を遠ざけ、恐怖を緩和しようとする試みである。このような恐怖から目をそらしたいがための仮名の使用は、Voldemort の真の姿を不透明、不明瞭にしている。Dumbledore は、こうしたことが、皮肉にも、Voldemort に対する恐怖を高めていたことを教えている。Voldemort が自身に行った名づけのように、You-Know-Who という仮名の使用も Voldemort に You-Know-Who という仮面を被せる行為である。真の姿に近づかないようにし、恐怖を覆い隠そうとした結果である。恐怖の対象を仮の名前ではなく本名で呼ぶことは、その者を見据え、向き合っていくことに繋がっていく。

一方で、Dumbledore が指揮する Voldemort への対抗組織 the Order of the Phoenix のメンバーであっても、Voldemort と呼ばない人もいる。代表的なのが、Ron を含む Weasley 一家である。一家が Voldemort に強い恐怖心を持っているのは確かである。だが、彼らは対抗組織に属し、Voldemort や the Death Eaters を倒すために尽力している。You-Know-Who と呼ぶ人物が、敵から逃げるような臆病者であることに必ずしも繋がるわけではない。

## 第4章 Harry の Voldemort への呼び名の変化

本章では、Harry による宿敵への呼び名が You-Know-Who、Voldemort、Tom Riddle と変わっていることに着目する。他者の名前をどのように扱うかが、相手をどのように考えているかという見方を表すことを第1章で述べた。第2章では魔法使

いによる You-Know-Who という名の使用、第3章では Voldemort 自身の名づけについて考察した。第1章で明らかにしたように、呼び名が相手への意識を表すのであれば、呼び名の変化は相手への意識の変化である。また、第3章で述べた通り、You-Know-Who という呼び名が恐怖からの逃避ならば、Voldemort や Tom Riddle という呼び名への変化は恐怖を受け止めようとする気持ちの表われである。Harry の敵に対する意識の変化を見ていく。

Harry は最初、自らが魔法使いだとは知らされていなかった。魔法世界から離れ、Voldemort に関して何も知らなかった Harry にとっては、Voldemort という名に恐怖を感じることはしばらくなかった。よって、Harry は敵の名を口に出すことにあまり抵抗は感じていない。

He [Harry] was starting to get a prickle of fear every time You-Know-Who was mentioned. He supposed this was all part of entering the magical world, but it had been a lot more comfortable saying 'Voldemort' without worrying.

(Rowling 1997, 80)

しかし、徐々に魔法世界の一員になっていくにつれ、その気持ちは変化していき、You-Know-Who と聞くと恐怖を感じるようになる。Harry は、第1巻で You-Know-Who と Voldemort という呼び名を両方使っている。しかし、敵と直接会い、Dumbledore に Voldemort と呼ぶように諭されたことで、Voldemort という呼び名に統一することになる。賢者の石を巡って Voldemort と直接対面するまでの Harry は、周りの人々からの情報で敵の情報を得ていく。McGonagall、Hagrid、Ollivander、Ron などによって、異なる場面で異なる人物から Voldemort のこれまでの経歴や過去の情報が与えられる。

Harry が11歳になると、Hagrid が Voldemort について Harry に話す。そこでは、Voldemort が Harry の両親を殺し Harry も殺そうとしたこと、しかしそれが失敗したことが伝えられる。またある時は、Harry が魔法使いに必要な杖を買いに行くと、その店主 Ollivander に Harry と Voldemort の杖に共通点があることを告げられる。こうして、Voldemort の情報が少しずつ集まり始める。

Harry には、月日が経つにつれ、Voldemort の情報が次々と与えられる。それも、一度にすべてではなく、異なる登場人物から、別の場面で小分けに明かされる。また、情報の付与だけでなく、度々 Voldemort が話題に上がる。例えば、Harry の親友 Ron の台詞である。

[. . .] My dad says it must've been a powerful Dark wizard to get round Gringotts, but they don't think they took anything, that's what's odd. 'Course, everyone gets scared when something like this happens in case You-Know-Who's behind it.' (Rowling 1997, 80)

Voldemort が引き合いに出され、その存在は、薄まることなく絶えず意識され、強い印象を残す。だが、Voldemort 本人が Harry の前に直接登場することはない。Harry には、死の呪文が跳ね返った後の Voldemort がどうなったのかほとんど分からない。Harry にとって危険な存在と強く意識させながら、Voldemort の真意や実体は分からないと言える。

そして、Voldemort は、夢という形でも、ほんやりとした姿を Harry に提供している。その登場は、緑の閃光、額の痛み、高笑いといったもので、その実体や行動をはっきりと確認できないものになっている。夢を見ることで、Harry は、両親の死に際の記憶をおぼろげながら思い出し、Voldemort の存在を感じることになる。次に述べる引用は、Harry が両親の死んだ状況を思いだそうとする場面である。

He couldn't remember being in the car when his parents had died. Sometimes, when he strained his memory during long hours in his cupboard, he came up with a strange vision: a blinding flash of green light and a burning pain on his forehead. This, he supposed, was the crash, though he couldn't imagine where all the green light came from. (Rowling 1997, 27)

Harry は、Vernon や Petunia から、両親は自動車事故で死んだと思わされていたため、この時点では、Voldemort による両親の殺害を知らない。そのため、当時の記憶を事故時のものだと思っている。しかし、緑の閃光や額の痛みといった Voldemort に繋がる痕跡を感じている。緑の閃光は、死の呪文のアバダ・ケダブラが使われた際に放出される。Voldemort が Harry の両親を殺害する際にこの呪文を使用したため、緑の閃光が Harry の記憶に残ったのであろう。また、Voldemort が Harry に額の稲妻型の傷を残したがために、思い出そうとすると額の痛みが起これると考えられる。

その後、自分が魔法使いだと知らされ、Hagrid から両親の死の経緯、Voldemort の悪業を語られると、Harry の記憶は少し鮮明になる。Harry が悪夢を見るようになると、その内容について、“Over and over again he dreamed about his parents disappearing in a flash of green light while a high voice cackled with laughter.”

(Rowling 1997, 158) と作中述べられている。夢の中でも、Voldemort の存在を匂わす緑の閃光や高笑いが登場する。Voldemort は、Harry の1歳の頃の曖昧な記憶や夢という形で、ぼんやりとした姿を Harry に提供する。その登場も、緑の閃光、額の痛み、高笑いといったその実体や行動をはっきりと確認できないものになっている。Voldemort は、存在が明確でなく、不透明であり、はっきりと捉えられない。彼は、その姿や感情、行動をはっきりと見せないがゆえに、実際に登場し行動せずとも、Harry に恐怖や苦痛を与える力を持っている。しかも Voldemort は、最終的に Harry の前に姿を見せた時でさえ、一人では明確な形を保つことはできない。

'Harry Potter . . .' it [the most terrible face] whispered.

Harry tried to take a step backwards but his legs wouldn't move.

'See what I have become?' the face said. 'Mere shadow and vapour . . . I have form only when I can share another's body . . . [ . . . ]' (Rowling 1997, 212-213)

Harry の中で、ぼんやりとした姿をしていた Voldemort は、実際の姿も霞のようであり、誰かに寄生しないと生きてはいけない。だが、醸し出される緊迫感や恐怖は、十分である。

陰に隠れることが、相手が持つ恐怖を増大させる効果があることは、Voldemort も理解している。Voldemort が復活した後、魔法省の大臣は Voldemort が魔法で操る人物になる。何故自らが魔法省大臣にならないのか、Lupin は以下のように説明する。

'Naturally many people have deduced what has happened: there has been such a dramatic change in Ministry policy in the last few days, and many are whispering that Voldemort must be behind it. However, that is the point: they whisper. They daren't confide in each other, not knowing whom to trust; they are scared to speak out, in case their suspicions are true and their families are targeted. Yes, Voldemort is playing a very clever game. Declaring himself might have provoked open rebellion: remaining masked has created confusion, uncertainty and fear.' (Rowling 2007, 171-172)

Voldemort は、自分が魔法省大臣となり、魔法世界を支配しようと表明することを避ける方策を取る。自らが表に立つことで、反乱を招く危険があるためである。自らが騒動の陰にいることを匂わせながらも、はっきりと宣言しない。Voldemort の仕

業なのか疑心暗鬼を魔法使いや魔女に引き起こさせ、不安を煽っている。魔法使い同士でもお互いが信用できるのか互いに疑うようになる。Voldemort は、恐怖とは、その対象が不明瞭になることでさらに増大することを知っており、魔法世界を不安に陥れようと画策している。

[. . .] 'Hagrid, he'd [Voldemort would] have found out somehow, this is Voldemort we're talking about, he'd have found out even if you hadn't told him.'  
'Yeh could've died!' sobbed Hagrid. 'An' don' say the name!'  
'VOLDEMORT!' Harry bellowed, and Hagrid was so shocked, he stopped crying. 'I've met him and I'm calling him by his name. [. . .]' (Rowling 1997, 219-220)

Dumbledore の “Always use the proper name for things.” (Rowling 1997, 216) という言葉を聞いた Harry は、その後、敵を Voldemort と呼ぶと Hagrid に宣言する。Harry がこれまでは夢や噂でしか知らなかった敵と直接戦うことによって、ほんやりとした実体の分からない敵ではなく、今後立ち向かうべき敵としての認識を得たと考えられる。You-Know-Who という仮面を Voldemort につけるのではなく、敵をまっすぐと見据えていく Harry の姿勢がこの言葉から分かる。

第6巻 *Harry Potter and the Half-Blood Prince* では、Dumbledore に連れられ、Harry は Voldemort の過去を追っていくことになる。Voldemort の母親は、好意を持っていたマグルの Tom Riddle を魔法で自分に振り向かせた。しかし、その魔法を使うのを止めると、彼はお腹の子と彼女を捨てる。失意の中で Voldemort を産んだ母親は、子どものために生きようとせず、産後すぐに亡くなる。Dumbledore は、“Merope Riddle chose death in spite of a son who needed her, [. . .]” (Rowling 2005, 246) と Harry に述べる。Merope が死亡した結果、Voldemort は、両親の愛を受けないまま孤児院に住むことになる。その孤児院で Voldemort は、魔法を使ってマグルの子どもたちを怖がらせてばかりいた。孤児院でも Hogwarts でも友人を持つことはなかった。Dumbledore は、“Lord Voldemort has never had a friend, nor do I believe that he has ever wanted one.” (Rowling 2005, 260) と Voldemort について考察している。そして、Hogwarts 在学時から、死から逃れようと Horcrux に目をつけ、情報を収集していた。卒業後に Horcrux になるようなものを集めていき、死を克服するため、他者を殺めることで自らの魂を分断し Horcrux に収めていく。その過程を Harry は Voldemort に関わった人々の記憶を覗いて追跡していく。

第7巻、最後の決戦で、Harry は自ら Voldemort に殺されることを選ぶ。Harry はその行為について、“I've done what my mother did. They're protected from you.”

(Rowling 2007, 591) と Voldemort に述べている。Voldemort は、死から逃れるために他者を犠牲にし、Harry は他者を守るために自ら死へと向かっていった。両者の違いは明白である。Dumbledore は Harry に “You are the true master of death, because the true master does not seek to run away from Death.” (Rowling 2007, 577) と述べている。死を制しようとして様々な策を講じてきた Voldemort は、ただ、死から逃れようとしてきたのである。一度は死の呪いに当たったものの、Harry は Voldemort の予期していなかった7番目の Horcrux になっていたため、死なずにすむ。死から生還した Harry は、Voldemort に向かって以下のように言っている。

[. . .] ‘I know things you don’t know, Tom Riddle. I know lots of important things that you don’t. [. . .]’ (Rowling 2007, 591)

Tom Riddle が知らず、Harry が知っていることとは、他者への愛であろう。Voldemort は、第1巻では不明瞭な存在であった。しかし、徐々に過去が判明していくことで友情や愛を知らず、死から逃避しようとする一人の人間として捉えられるようになる。Voldemort という仮面の下にいる Tom Riddle の弱さに Harry は気づく。敵への見方の変化が、Tom Riddle という呼びかけに反映されている。You-Know-Who、Voldemort、Tom Riddle と呼び名が変化することによって、漠然とした恐るべき敵から欠点を抱えた敵、一人の人間として Harry の中で敵の見方が変化していく様分かる。

## おわりに

本論文では、「ハリー・ポッター」シリーズにおいて、Voldemort が持つ複数の呼び名に着目した。他者の名前の扱い方には、相手に対する見方が表れている。また、相手を怖がり、本当の名で呼ばないことは、本来の姿を仮面で覆って隠す行為である。仮の名の使用は、敵の本来の姿を知り、敵と向き合うことを難しくさせる。Harry がホグワーツに入学したばかりの頃、Voldemort は Harry にとって実体が隠された恐ろしい敵であった。しかし、最終的には、愛を知らない、守るべき大切な存在がいない人間という認識が変わる。Harry の敵への見方の変化が、You-Know-Who、Voldemort、Tom Riddle という呼び名の変化に反映されている。呼び名の変化は、Harry が敵から逃げずに戦おうとする姿勢の表れである。そしてまた、彼が敵へと立ち向かった足跡と言える。Voldemort への呼び名を通して見える Harry の敵へ

の姿勢は、恐怖から逃げようとせず、敵を直視し、敵に立ち向かうべきだという本シリーズのメッセージを映している。

(本論文は、2017年10月28日、10月29日に開かれた日本イギリス児童文学学会第47回研究大会において行った発表「『ハリー・ポッター』シリーズにおける名前の機能」に加筆修正を行ったものである。)

## 使用テキスト

- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury Publishing, 1997.
- *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.
  - *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury Publishing, 1999.
  - *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
  - *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
  - *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
  - *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.

## 引用文献

- 市村弘正「『名づけ』の精神史」『[増補]「名づけ」の精神史』、平凡社（平凡社ライブラリー）、1996年
- 国広哲弥「特集 私の『呼称』論 『呼称』の諸問題」『日本語学』第9巻9号、明治書院、1990年、4-7頁
- 寺島久美子『ハリー・ポッター大事典Ⅱ 1巻から7巻までを読むために』、原書房、2008年
- フレイザー、ジェームズ『金枝篇 (二)』永橋卓介訳、岩波書店（岩波文庫）、1966年
- 穂積陳重『忌み名の研究』穂積重行校訂、講談社（講談社学術文庫）、1992年
- ローリング、J. K.・フレイザー、リンゼイ『作者と話そうシリーズ Vol. 1 J・K・ローリング ハリー・ポッター裏話』松岡佑子訳、静山社、2001年
- 渡辺友左「特集 人の呼び方 『呼称』という論点」『日本語学』第17巻9号、明治書院、1998年、4-11頁